

何をつかまえようとしたのか。一瞬だが、忘れられない出来事があった。

認知症の高齢男性の成年後見人を務めている友人がいる。社会福祉士で裁判所から選任された。久しぶりに飲もうとした日の夜、男性が入所施設で倒れ病院に運ばれた。入院手続きをする必要があり、急ぎょ一緒に入院先に向かった。

ベッドに寝ている男性は、意識はあるが、名前を呼ばれても反応しない。数年前に妻を亡くした後、認知症に。子供も身元を引き受ける親族もないという。

友人が看護師と話をするため、病室

憂楽帳



右腕

を出た。ベッドのそばに一人、座っていると突然、男性が右腕を天井に向けて突き上げ、空中の何かをつかもうとした。思わず、腰が浮くほど驚いた。戻った友人が右手を握りながら話しかけたが、結局、会話はできなかった。

周囲も「どんな仕事をしてきたかがよく分からない」という男性。腕の動きは働いていた頃の記憶がさせたのか。

認知症の高齢者は昨年で305万人（厚生労働省推計）。生きながら失われていく膨大な記憶。偶然の出会いがその深刻さを改めて気づかせた。【玉木達也】

2013.6.6

毎日新聞 2013.6.6 夕刊